02 歷史展示の具体的内容

歷史ストーリー

テーマストーリー
<国家の確立>

語り部　藤原仲麻呂

<国家の確立>　概要

明日香において律令国家の骨格が成立しましたが、遣唐使の派遣をきっかけにさらなる体制の整備に取り組むことになりました。不比等の死後、藤原氏とそれに対抗する勢力、僧侶などが政治の実権をめぐって勢力争いを繰り広げていきます。律令国家の確立の時期を迎えるとともに、新たな課題が表面化していく、奈良時代の政治の展開を紹介します。

【1】平城京遷都

藤原京遷都、大宝律令完成などによる律令国家の成立を受けて702年、粟田真人らは唐に出向きました。しかし、彼らが唐で見聞した都城や律令は、日本のそれと大きく違いました。藤原不比等らは真人の報告をもとに政治改革に乗り出し、和同開珎の鋳造、養老律令の作成、『古事記』『日本書紀』という国史の編纂などの事業を次々に行い、唐に比肩する律令国家の確立に向けて体裁を整えていきました。そして710年、長安の都城制にならった平城京への遷都を実現しました。

▼

【2】光明子の立后

720年に藤原不比等が亡くなると、天武天皇の孫にあたる長屋王が政治の主導者となります。聖武天皇には有力な後継男子がいなかったため、長屋王は皇親勢力の代表者として絶大な権力を握りました。ところが光明子の立后をめぐって藤原四子らと対立し、彼らの陰謀と思われる「長屋王の変」がおこります。長屋王の死後、光明子は皇后となり藤原四子が実権を握りましたが、天然痘の大流行により藤原四子ら政府首脳が相次いで病死し、政界は大混乱となりました。

▼

【3】藤原広嗣の乱

藤原四子の死後、橘諸兄が光明皇后の異父兄として実権を握りました。諸兄が吉備真備や僧玄昉らを登用すると、これに不満を持った藤原広嗣が九州で反乱を起こします。疫病や天災の頻発に加え、この広嗣の乱に動揺した聖武天皇は、恭仁、難波、紫香楽へと遷都を繰り返すとともに、大仏造立による鎮護国家樹立を目指します。その後も政治の混乱が続きましたが、最終的には平城京に都が戻り、大仏造立事業も東大寺において進められ、752年に大仏開眼の日を迎えました。

▼

【4】養老律令の施行

藤原仲麻呂が台頭すると政界の派閥争いが激化し、橘諸兄に登用された吉備真備は九州に左遷されました。仲麻呂の台頭に不満を持つ橘奈良麻呂らの叛乱計画を事前に鎮圧すると、仲麻呂は養老律令を施行するとともに唐風政治を推進して、自らも「恵美押勝」と改名します。その後恵美押勝は、皇族以外では初となる太政大臣に就任し、権力の絶頂期を迎えます。しかし、光明皇太后が亡くなり、孝謙上皇が僧道鏡を寵愛するようになると、恵美押勝の権力に陰りが見え始めました。

▼

【5】道鏡事件

道鏡排除を目的とした恵美押勝の挙兵が吉備真備らによって鎮圧され、重祚した称徳天皇のもとで道鏡が実権を握って仏教政治を推進しました。さらに、宇佐八幡宮の神託により道鏡が皇位を伺うという事件(道鏡事件)が起こりますが、これは和気清麻呂らによって阻止されました。そして称徳天皇崩御とともに道鏡は失脚、仏教政治は収束に向かいました。その後、皇位は光仁天皇から桓武天皇へと継承され、混乱した政治の刷新を図るために長岡京遷都が行われて、奈良時代は終焉を迎えました。

人物を中心とするエピソードストーリー

奈良時代の政治史の展開の中で特徴的に登場する5人の人物にスポットをあてて、その人物に関係するエピソードを交えたストーリーという切り口で、語り部の藤原仲麻呂が、時代の移り変わりを解説します。

〈粟田真人〉 ～平城京遷都の演出家～

天皇の名代であることを示す「節刀」を授けられ、遣唐執節使として入唐した粟田真人は、日本が正式な律令国家になったことを伝えるために、皇帝の武則天に謁見しました。ところが、中国のはるかに進んだ文明を目にし、日本のレベルの低さを痛感して帰国した真人は、その後の政治改革や新都造営において、演出家的役割を果たしました。粟田真人の伝えた東アジアの最新情報が、「平城京遷都」という、時代の大きな転換をもたらしたのです。

〈登場人物〉 粟田真人、藤原不比等、武則天、元明天皇

〈長屋王〉 ～皇親勢力の巨頭～

長屋王は、天武天皇の長子・高市皇子の子で、元正天皇の妹・吉備内親王が妃であるという抜群の血統を背景に、皇親勢力の巨頭として政治の主導権を握りました。長屋王は律令国家の整備に尽力しましたが、聖武天皇の後継者問題と光明子の立后をめぐって藤原氏と対立するようになりました。皇位継承の有資格者でもあった彼に謀反の疑いがかけられた「長屋王の変」ののち、光明子が皇族以外で初の皇后となり、藤原四子が実権を握りました。

〈登場人物〉 長屋王、聖武天皇、光明子、元正上皇、藤原武智麻呂

〈橘諸兄〉 ～国難を乗り切り長期政権～

天然痘の大流行によって藤原四子政権が崩壊すると、光明皇后の異父兄にあたる橘諸兄が政権を担当しました。諸兄は、吉備真備や僧玄昉など、家柄にこだわらず人材を登用して改革を推進し、政治の難局を切り抜けようとしました。それに反発して藤原広嗣の乱が起こると、動揺した聖武天皇は遷都を繰り返し、やがて仏教に活路を見いだして大仏造立を企図します。平城京復都後、東大寺に大仏が完成し鎮護国家の理想が具現化されるまで、橘諸兄はうち続く国難を乗り切って、20年にわたる長期政権を維持し、聖武天皇と光明皇后を支え続けました。

〈登場人物〉 橘諸兄、聖武天皇、光明皇后、吉備真備、玄昉、藤原広嗣、藤原仲麻呂

〈恵美押勝〉 ～律令の完成をめざす～

孝謙天皇が即位すると、光明皇太后がその後見に就き、皇太后の甥にあたる藤原仲麻呂が、大納言および紫微中台の長官として政権を支えました。橘諸兄が引退し、仲麻呂の専横に反発して橘奈良麻呂の乱が起こると、仲麻呂はこれを鎮圧して反対派を一掃しました。養老律令を施行するとともに、淳仁天皇のもとでは「恵美押勝」と改名し、唐風政治を推進して律令国家の完成をめざしました。その後、大師(太政大臣)に就任して権力の絶頂期を迎えましたが、孝謙上皇の寵愛を受けて僧道鏡が台頭すると、その権力に陰りが見え始めました。

〈登場人物〉 恵美押勝、孝謙天皇、光明皇太后、吉備真備、橘奈良麻呂

〈吉備真備〉 ～「激動の奈良」を見届ける～

吉備真備は橘諸兄政権で登用され、国難の時期を乗り切ってきました。その後、藤原仲麻呂によって九州に左遷されていましたが、道鏡の台頭に伴い、孝謙上皇によって都に呼び戻されました。恵美押勝(藤原仲麻呂)の乱では討伐軍の司令官として反乱を鎮圧し、道鏡政権のもとでは右大臣にまで昇進して、仏教政策推進の陰で律令政治の整備に尽力しました。道鏡事件に際しても、律令政治の根幹を見失うことなく冷静に対応、称徳天皇が亡くなると後継に光仁天皇を擁立し、道鏡を下野薬師寺に左遷して政治の立て直しを図りました。その後、藤原百川らによって山部親王(のちの桓武天皇)が皇太子に擁立されると、吉備真備は「激動の奈良」の終焉を見届けるように、静かにその人生の幕を閉じたのです。

〈登場人物〉 道鏡、恵美押勝、孝謙上皇(称徳天皇)、吉備真備、和気清麻呂、藤原百川、桓武天皇

＜国家の確立＞　ストーリー詳細

藤原仲麻呂の語りによる「テーマ：国家の確立」についての解説

［藤原仲麻呂］
私は藤原仲麻呂。奈良時代の政治家です。飛鳥時代に律令国家の骨格ができあがりましたが、奈良時代には律令の不備を修正し、日本の実情に適合するようにその内容を充実させていきました。その過程で、天皇を取り巻く皇親勢力、藤原氏、諸豪族、僧侶などが政治の主導権をめぐって争いを繰り広げていきます。律令国家として確立していく奈良時代の政治の展開を紹介いたしましょう。

第1章　平城京遷都

＜粟田真人＞　～平城京遷都の演出家～

大宝元年(701)正月、粟田真人は藤原不比等や刑部親王ら政府首脳が見守る中、藤原宮大極殿において文武天皇から「節刀」を授与されました。こうして遣唐執節使に任命された粟田真人は、天皇の名代として唐の皇帝に謁見すべく、中国に向かうことになったのです。

遣唐使として入唐

694年、中国を手本とした藤原京へ遷都し、697年に文武天皇が即位しました。藤原不比等、刑部親王、粟田真人らの手によって701年に「大宝律令」が完成し、「日本」の国号や「天皇」の称号が正式に使用されるようになりました。律令国家としての体裁を整えた日本がそのことを中国に知らせるため、粟田真人を代表とする遣唐使は702年、長安に向けて出発しました。

今回の遣使は、白村江の戦い(663年)で唐と敵対して以来、40年近くも断絶状態となっている中国との国交回復の目的も持っており、粟田真人はそうした大きな役割を担っているということで、特別に「節刀」が授与されたのです。彼は翌年、長安に到着し、武則天に謁見しました。真人は唐において「よく経史を読み属文を理解することのできる賢い人物で、その姿や振る舞いもすばらしい」との評価を受け、特別に武則天から「司膳卿(従五品相当)」の官職を与えられました。

［粟田真人］
なんと、唐がなくなっている！10年以上も前に「武周」に替わっていたという。
都城制の思想も違う。藤原京は、中華思想に基づく理想の帝都だと自負していたのに、長安は機能性を重視して進化した最先端の都だ。これでは「日本は古くさい国だ」と思われてしまうぞ。また、律令や貨幣経済が人々の生活にしっかりと根付いている。わが国では、銭が何かさえ知らぬ者が大半だ。都のにぎわいも比べものにならない。
知らなかったことが山ほどあるではないか！これでは中国と肩を並べることなど到底無理だ。律令の運営の仕組みを中国から直接に学んで、真の律令国家を目指して新たな改革を進めなくてはいかん。

慶雲の改革

日本では703年から707年にかけて連続的に飢饉が発生し、加えて大宝律令の税体系の不備により貧窮する農民が続出しました。慶雲元年(704)に帰国した粟田真人の報告を受けた文武天皇や藤原不比等らは、社会の実態に合わせた制度への改革に乗り出すことになりました(慶雲の改革)。

705年、粟田真人は中納言に任命され、入唐で得た知識をもとに税制改革や貧窮対策など、大宝令施行後の不具合を調整する政策を次々と打ち出していきました。

ところが改革進行中の707年、文武天皇が25歳の若さで亡くなられ、長子の首皇子は、まだ7歳でしたので、祖母にあたる阿閇皇女が首皇子への中継ぎとして即位し、元明天皇となりました。

登場人物紹介 ／ 用語解説

語り部：藤原仲麻呂

【ふじわらのなかまろ】（706～764）

藤原南家の祖・藤原武智麻呂の次男。
叔母にあたる光明皇后の信頼を背景に異例の昇進を遂げ、孝謙天皇の時代に政治の主導権を握る。大仏造営事業にも積極的に関与し、また祖父・藤原不比等が着手した養老律令を施行。
橘奈良麻呂の乱を通じて反対派勢力を一掃、淳仁天皇の時代には唐風政治を推進し、藤原恵美押勝と改名。55歳の時、皇族以外では初となる大師(太政大臣)に就任した。
光明皇太后の死をきっかけに権力が後退。道鏡の台頭を阻止するために起こした軍事行動が反乱とされ敗北。妻子とともに逃走途中に捕まり、58歳の生涯を閉じた。

粟田真人

【あわたのまひと】（生年不詳～719）

●653年、僧・道観の名で唐に留学。帰国後還俗して、天武～元正天皇の朝廷に仕える。
●文武天皇の時代、大宝律令の編纂に参加。　●701年、遣唐執節使に任命され、翌年唐に渡り、704年に帰国。
●最終官位は、正三位・中納言。

藤原不比等

【ふじわらのふひと】（659～720）

●藤原鎌足の次男。
●不比等の子孫のみが藤原姓を名乗り、太政官の官職に就くことができたので、実質的に藤原氏の家祖。
●文武～元正天皇の時代に政治を主導した。　●「大宝律令」および「養老律令」編纂の中心的人物。
●最終官位は、正二位・右大臣。死後、正一位・太政大臣を贈られる。

刑部親王

【おさかべしんのう】（生年不詳～705）

●天武天皇の皇子。忍壁皇子とも表記される。　●藤原不比等らとともに「大宝律令」を編纂

文武天皇

【もんむてんのう】（683～707／在位 697～707）

●第42代天皇。天武・持統天皇の子・草壁皇子の長男。　●15歳の時、祖母・持統天皇からの譲位により即位。
●702年までは、持統が太上天皇として後見役を務めていた。

［節刀］

〈せっとう〉

天皇が出征する将軍または遣唐使の大使に持たせた、任命の印としての刀。「節」は符節（割り符）のことで、使臣が印として持つ物の意。任務を終了すると天皇に返還された。

武則天（則天武后）

【ぶそくてん(そくてんぶこう)】（623～705／在位 690～705）

●唐の高宗の皇后。中国史上唯一の女帝となり、「武周」朝を建てた。　●日本では則天武后と呼ばれることが多い。

［司膳卿］

〈しぜんきょう〉

唐の官職。食物およびお膳をつかさどる役職。従五品の中級官人に相当する。

首皇子

【おびとのおうじ】（701～756）

●文武天皇の長男。のちの聖武天皇。母は藤原不比等の娘・宮子。

元明天皇

【げんめいてんのう】（661～721／在位 707～715）

●天智天皇の4女、阿閇(あへ)皇女。　●天武天皇の皇太子・草壁皇子と結婚し、文武天皇、元正天皇をもうける。
●第43代天皇。皇后を経ない初の女帝となる。　●715年、高齢を理由に元正天皇に譲位、太上天皇となる。

（～続き）第1章　平城京遷都　‹粟田真人›　～平城京遷都の演出家～

［藤原不比等］
粟田真人の報告によると、中国の律令は社会の実態に合わせて修正が加えられ、実際的に運用されている。わが国では大宝律令に従わせようと無理をしていたようだ。
そこで粟田真人を中心に、社会の実態に合わせた運用をめざして慶雲の改革を進めてきた。これは、律令に基づく国家体制の強化を図るものである。文武天皇が亡くなられたが、この流れは変わるものではない。元明天皇もそのことを理解されているので、私は、さらなる改革を進めていくぞ。

平城京遷都へ

元明朝において藤原不比等は右大臣となり、唐に倣った国政改革はさらに進められ、和銅元年(708)には貨幣制度を整えるため、初の流通貨幣である和同開珎が発行されました。また、平城京遷都の詔も発せられ、長安を手本とした新都造営が進められることになりました。いずれも粟田真人の報告に基づき、日本が唐と肩を並べる真の律令国家となるための大きな決断だと言えます。

［元明天皇］
藤原京遷都からわずか16年、今また平城京という新都建設のため、民に重い労役を課すことには心が痛む。しかし、わが国を唐と対等につきあえるような強い国にするためには、この試練を乗り越えなくてはならないのじゃ。
平城京は「四禽図に叶い、三山鎮めをなす」理想的な場所である。首皇子が天皇となる頃には、日本はきっと素晴らしい国になっているに違いない。朕はその礎となれるよう、力を尽くす覚悟じゃ。

律令制の整備

710年、平城京遷都が開始され、王族・貴族の邸宅のほか官大寺や氏寺も次々と移されて、都としての威容が整えられていきました。それとともに東北の蝦夷や九州南部の隼人に対し、朝廷への服属要請を進めるなど辺境の国土確定も積極的に行われ、都と地方を結ぶ交通網も整備されました。また、『古事記』『日本書紀』といった歴史書や諸国の地誌をまとめた『風土記』の編纂、「養老律令」につながる律令の改訂や格式の作成作業などが、藤原不比等を中心に進められていきました。

ところが、719年に粟田真人が、翌年には藤原不比等が亡くなり、「養老律令」編纂事業は中断します。

［藤原不比等］
父の鎌足が天智天皇とともに律令国家樹立をめざした頃には、「律令」という言葉さえ知られていなかった。今、唐の長安を模した平城京へと遷都し、目に見える形で国家体制が整いつつある。
粟田真人のおかげで、今回はより完全なものに近づけることができた。彼の功績は言葉で言い尽くせないほどだ。しかし、こうした体制を唐のように隅々まで浸透させるには、まだまだ時間がかかるだろう。
律令国家の完成を見ずに世を去るのは残念だが、わが子孫が必ずこの志を継いでくれるものと信じている。

ちなみに「養老律令」の編纂事業は、不比等の孫である私・藤原仲麻呂が復活させ、それを施行することになるのです。

登場人物紹介 ／ 用語解説

［和同開珎］ 〈わどうかいちん／わどうかいほう〉

708年に鋳造された銭貨で、唐の開元通宝にならったもの。銀・銅の両銭があり、政府は山城・周防など各地に鋳銭司を置いて鋳造した。

［四禽図に叶い、三山鎮めをなす］ 〈しきんとにかない、さんざんしずめをなす〉

「四禽図に叶い」とは、四神相応のこと。東西南北にそれぞれ青龍・白虎・朱雀・玄武の四神（四禽）が存在するのにふさわしい地勢や地相が備わっている という考え方。
「三山鎮めをなす」とは、三つの山が京の地の地鎮となるという意味で、中国の東海の彼方に不老不死の仙人たちが住むという、方丈・蓬莱(ほうらい)・瀛洲(えいしゅう)の三神山が浮かぶという伝説によるもので、都の繁栄を願ったためと思われる。藤原京が香具山・畝傍山・耳成山の三山を取り込んでいたのにならい、平城京では御蓋山(みかさやま)・平城山(ならやま)・宝来山(ほうらいさん)古墳〈垂仁天皇陵〉の三山をこれにあてる説がある。

［古事記］ 〈こじき〉

稗田阿礼が誦習した神代から推古天皇までの天皇系譜や天皇家の伝承を太安万侶が筆録して、712年に元明天皇に献上したもの。漢字の音訓を用いて口頭の日本語を文章に表現する。上中下3巻からなる。

［日本書紀］ 〈にほんしょき〉

神代から持統天皇に至る編年体史書。日本の現存最古の史書で30巻と系図1巻からなる。ただし系図は散逸。
舎人親王、藤原不比等らによって編纂され、720年に完成。

［風土記］ 〈ふどき〉

各国別にまとめられた古代の地誌。713年、諸国に撰進が命じられる。各国の地名の由来・産物・伝承などを記載。
常陸・出雲・播磨・豊後・肥前の5つの風土記が現存する。

［養老律令］ 〈ようろうりつりょう〉

大宝律令を日本の国情に適合した内容に改修したもの。律10巻12編で推定497条、令10巻30編で953条。
編纂途中で、藤原不比等が亡くなったため、作業が中断したと思われる。「養老律令」自体は現存せず、その注釈書として平安前期に編集された『令義解(りょうのぎげ)』『令集解(りょうのしゅうげ)』などにより復元。ただし律は多くが散逸し、一部のみ復元。
757年、藤原仲麻呂によって施行されたが、これには不比等が進めた律令体制の整備を、仲麻呂が継承していることを宣言する意図があったと考えられる。

藤原(中臣)鎌足 【ふじわら(なかとみ)のかまたり】(614～669)

- 祭祀を掌る中臣氏の一族に生まれ、中大兄皇子と共に乙巳の変(いっしのへん)で蘇我氏を倒し、改新政治を推進した(大化改新)。
- 改新政府では、内臣(うちつおみ)となり、臨終に際して天智天皇より大織冠の位と藤原姓を与えられている。
- 藤原氏繁栄の礎を築いた藤原氏の始祖。

天智天皇 【てんちてんのう／てんじてんのう】(626～672／称制 661～668　在位 668～672)

- 中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)。父は舒明天皇、母は皇極(斉明)天皇。
- 645年、中臣鎌足と共に乙巳の変で蘇我氏を倒し、改新政治を推進(大化改新)。
- 斉明天皇が亡くなったあと、皇太子のまま政治を主導(称制)。
- 第38代天皇。近江大津宮に遷都したのち、即位。近江令を制定し、庚午年籍(こうごねんじゃく)を作成したという。

第2章　光明子の立后

<長屋王>　～皇親勢力の巨頭～

天武天皇の孫にあたる長屋王は、義姉の元正天皇の信頼を得て急速に権力を強め、皇親勢力の代表者となりました。平城宮の南東にある長屋王邸には立派な庭園があり、外国からの賓客を迎えて盛大な宴会がしばしば催され、曲水の宴などが行われていました。

長屋王の登場

長屋王は、天武天皇の嫡流の孫として、叔父・舎人親王とともに皇親の中心的存在でした。藤原不比等の娘・長我子(ながこ)を妃としていたので、不比等政権の下での長屋王は藤原氏寄りの立場をとっていて、 717年に左大臣の石上麻呂が亡くなると、翌年、非参議からいきなり大納言に任ぜられ、右大臣の不比等に次ぐ政界第二位の地位に昇進しました。

715年、母・元明天皇の譲位により即位した元正天皇は、妹・吉備内親王とその夫・長屋王に厚い信頼を寄せていました。720年に不比等が亡くなると、その子の藤原四兄弟たちがまだ若かったこともあって、長屋王が政界の主導者として台頭しました。

[長屋王]
藤原不比等や元明上皇が亡くなられた今、国を安定させ、蝦夷や隼人に反乱を起こさせないためには、とにかく国力をつけることが一番重要だ。まずは田を増やし、税収を増やすのだ。また官人には国家の役人たる自覚を持たせ、民は国が厚く保護することも大切だ。日本という国をここまでにした不比等殿や上皇様の努力を無駄にしないためにも、私は一層の政治改革に励むつもりだ。

長屋王は721年に右大臣となると、百万町歩の開墾計画や三世一身法の発布により、開墾を奨励し税収の増加を図りました。東北地方の蝦夷が反乱を起こすと征討軍を派遣し、沈静後に多賀城を築いて蝦夷の監視機関としました。また、官人の綱紀粛正や公民の保護・救済策などによって、律令制を広く浸透させようと努力したのです。

光明子立后への動き

724年、首皇子が即位して聖武天皇となると同時に、長屋王は左大臣に昇進し、さらに権力を拡大しました。ただし、彼の叔父にあたる舎人親王が720年に「知太政官事」に任じられており、長屋王政権の独走を牽制していました。この頃から皇親勢力の巨頭である長屋王と、私の父・武智麻呂ら藤原四兄弟との対立が見られるようになったのです。

一つは724年、聖武天皇が生母である藤原宮子に対し「大夫人」の尊号を贈ろうとしたときのことです。その尊号が律令の規定にないことを理由に長屋王が反対し、藤原氏の特別扱いを認めませんでした。

二つ目は727年、聖武天皇の妃で藤原四兄弟の異母妹にあたる光明子に待望の男子が産まれたときです。藤原氏はその基王(もといおう)を生後1ヶ月で立太子しましたが、彼は1年も満たずに亡くなりました。すると、この早世は長屋王の呪詛によるものだとの噂が流れたのです。

三つ目は728年、藤原氏の血筋ではない安積(あさか)親王が生まれると、その立太子を妨げるために、藤原四兄弟は光明子を皇后に立てようと考えました。しかし長屋王は、藤原氏勢力の伸張を押さえるため、光明子の立后に反対したのです。

[長屋王]
基王が亡くなったことは、私には全く関係がない。藤原氏は、聖武天皇がそうであるように、なんとか藤原氏の血筋で天皇家を継承していきたいと考えており、私の存在が邪魔になっているのだ。私は皇親勢力の代表者として、祖父の天武天皇によって確立された君臣身分の区別を維持したいと思っている。
皇后は天皇に即位する資格を持つことになるので、皇族以外の立后は前例がなく、光明子の立后は認めるわけにはいかないのだ。これを見過ごすと、天皇家は藤原氏に乗っ取られてしまうだろう。

登場人物紹介 ／ 用語解説

天武天皇

【てんむてんのう】(631?～686／在位 673～686)

●大海人皇子(おおあまのおうじ)。舒明天皇の子で天智天皇の弟にあたる。
●第40代天皇。壬申の乱後、飛鳥浄御原宮で即位。在位中、大臣を置かず皇親政治を行った。
●「八色の姓」という新身分秩序を構築するとともに、飛鳥浄御原令や国史の編纂にも着手した。

長屋王

【ながやおう／ながやのおおきみ】(684～729)

●天武天皇の長男・高市皇子の長男。母は天智天皇の娘・御名部(みなべ)皇女で、元明天皇の同母姉。
●吉備内親王との間に4男、藤原長我子との間に3男があり、彼らが有力な皇位継承候補者であることが政争の一因。

元正天皇

【げんしょうてんのう】(680～748／在位 715～724)

●草壁皇子と元明天皇の長女。文武天皇の姉。
●第44代天皇。715年、元明天皇から譲位を受け即位。独身で即位した初めての女性天皇。

[曲水の宴]

〈ごくすいのえん／きょくすいのうたげ〉

水の流れのある庭園などで、その流れのふちに出席者が座り、流れてくる盃が自分の前を通り過ぎるまでに詩歌を読み、出来なければ罰として盃の酒を飲むという行事。(ただし奈良時代にはこれとは違う形式で行われた可能性があるが、明確な記録は残っていない。)

舎人親王

【とねりしんのう】(676～735)

●天武天皇第3皇子。　●藤原不比等の死後、知太政官事に就任し、長屋王とともに皇親政治を樹立した。

石上麻呂

【いそのかみのまろ】(640～717)

●もとは物部姓。天武朝の頃、石上姓に改変。　●文武朝で右大臣、元明・元正朝で左大臣を務める。
●芸亭(うんてい)で知られる石上宅嗣の祖父。

[参議]

〈さんぎ〉

「宮中の政に参議する」の意味で、大臣、大納言・中納言とともに太政官の意思決定機関(議政官)の一員となった。

吉備内親王

【きびないしんのう】(686？～729)

●草壁皇子・元明天皇の次女。元正天皇、文武天皇の妹。
●長屋王の妃となり4人の男子をもうけたが、長屋王の変で王や息子たちと共に死去。

[三世一身法]

〈さんぜいっしんのほう〉

723年発布。開墾奨励の目的で新たに溝池をつくって開墾した田は三世代、旧来の施設を利用して開墾した田は本人一代の私有を認める法令。前年の「百万町歩開墾計画」を遂行するために出されたと考えられる。

[知太政官事]

〈ちだじょうかんじ〉

太政官の長官として万機を総攬する官職。令の規定にはない「令外官(りょうげのかん)」の一つ。
皇族の有力者が任命されたが、「太政大臣」に任命すると、皇太子指名に相当するとの誤解を与え、皇位継承が不安定化することを避ける配慮があったと考えられる。
最初に任命されたのは刑部親王で、持統上皇が崩御した時に文武天皇が20歳と若年であり、天皇の補佐が必要だと考えられた。舎人親王も右大臣・藤原不比等の死による政権不安定期に任命されている。

聖武天皇

【しょうむてんのう】(701～756／在位 724～749)

●首皇子。文武天皇の長男。母は藤原不比等の娘・宮子。
●第45代天皇。国家の安寧を仏教に求め、大仏造立を発願し、752年に大仏開眼を実現する。

光明子(光明皇后)

【こうみょうし(こうみょうこうごう)】(701～760)

●藤原不比等と県犬養橘三千代の娘。　●聖武天皇の皇太子時代に妃となり、阿倍内親王(孝謙天皇)を産む。
●長屋王の変後、皇族以外で初の皇后となる。　●孝謙天皇即位後も、その後見役として実質的に国政を掌握。

（～続き） 第2章　光明子の立后

‹長屋王› ～皇親勢力の巨頭～

長屋王の変

729年2月、下級役人の塗部君足と中臣宮処東人が、「長屋王は天皇を呪詛し、天皇亡きあとに自らが天皇となろうと謀っている」と訴え出ると、藤原宇合らの率いる兵士たちが長屋王の邸宅を取り囲み、舎人親王や藤原武智麻呂らが王を糾問しました。追い詰められた長屋王は妃の吉備内親王およびその子らとともに自害したのです。

［元正上皇］
長屋王が聖武天皇を呪詛したということだが、私には到底信じられぬ。これは、光明子を皇后の位につけようとする藤原四子たちが、それに反対する長屋王を退けるために仕組んだ罠だと思う。
基王が亡くなったときに長屋王の呪詛のせいだとの噂を流したのも、彼らにちがいないのだ。
天皇家とつながることで大きな権力を得てきた藤原氏としては、どのような手段を使ってでも光明子の立后を実現したかったのだろう。なんと無茶なことをするものよ。悪いことが起こらねばよいのだが…。

藤原四子政権

長屋王の変と呼ばれるこの事件の真相は、結局はっきりしないまま、その半年後、光明子は皇族以外で初の皇后となりました。大納言や参議といった国政の中枢の役職には、各氏族から一人ずつ選ばれるのが慣例でしたが、藤原武智麻呂、房前、宇合、麻呂の四兄弟はその慣例を破って同時に登用され、彼らが、同じ藤原氏の血縁である聖武天皇と光明皇后を支えるという、異例の政治体制ができあがったのです。

藤原四兄弟が政権を担ったこの時期、政情は比較的安定し、税収も豊かでした。遣唐使の派遣や各道の軍団の強化を図るための節度使の設置など、外交や軍事政策も積極的に進められました。

［藤原武智麻呂］
藤原氏出身の光明子が皇后となったことに対して、反発があることは承知している。しかし、藤原氏が天皇家に寄り添って、政治に力を発揮してこそ国は安定すると、私は信じている。
わが国に律令制を根付かせた藤原不比等の息子として、その名に恥じない政治をしてみせる。まずは地方の郡司たちが管理していた稲を、国のものとしてきちんと位置づけよう。外国を牽制するために軍備も充実させるのだ。蝦夷や隼人も今度こそ従わせてみせるぞ。

天然痘の大流行

ところが、734年に畿内を中心とする大地震が起き、翌年から毎年のように飢饉が続きました。さらに天然痘が流行するなど、不吉な予兆が現れたのです。

そして、737年の天然痘大流行は日本全土に広がり、全人口の25～35％が死亡するという大惨事となりました。藤原四兄弟もこれに巻き込まれ、4ヶ月の間に全員が相次いで病死し、8人いた政府中枢官僚の5人が亡くなる緊急事態を招きました。

これらのできごとは、藤原四兄弟の陰謀により自殺に追い込まれた長屋王の祟りであるとの噂も流れました。私の父・武智麻呂や叔父たちを始め、多くの公卿が天然痘に倒れたことは、政府および藤原氏にとって危機的な状況でした。

しかし、当時従五位下の地位で、まだまだ駆け出しであった私・仲麻呂にとっては、上の人たちがいなくなって昇進のチャンスに恵まれたと言えるでしょう。

登場人物紹介 ／ 用語解説

塗部君足

【ぬりべのきみたり】（生没年不詳）

●中臣宮処東人とともに長屋王を密告した人物。（詳細については記録がなくわからない）

中臣宮処東人

【なかとみのみやこのあずまびと】（生年不詳～738）

●長屋王を密告したのち、無官から外従五位下に叙せられる。（「外」とは、中央豪族出身以外に与えられる位）
●738年、囲碁に興じていた際、長屋王に恩恵を受けた大伴子虫と口論になり斬殺された。

［呪詛］

〈じゅそ〉

自分にとって不都合なものあるいは対立者や敵対者をまじない呪うこと。呪法や呪術は、不幸や災害を避け生命の長生や生活の安全を図るために使われたが、他者を呪うためにも用いられた。

藤原武智麻呂

【ふじわらのむちまろ】（680～ 737）

●藤原不比等の長男。「藤原南家」の祖。
●長屋王失脚後、大納言。734年、右大臣に昇進し政権の中心人物となるが、737年、天然痘にかかり病死。
●臨終に際し、正一位・左大臣を授けられた。

藤原房前

【ふじわらのふささき】（681？～737）

●藤原不比等の次男。「藤原北家」の祖。
●政治的力量は四兄弟のうち随一で、717年、兄の武智麻呂に先んじて参議となった。
●元正朝で内臣に任じられたが、正式な官位は正三位・参議。737年、他の兄弟に先んじて天然痘に倒れた。

藤原宇合

【ふじわらのうまかい】（694～737）

●藤原不比等の三男。初名は「馬養」。「藤原式家」の祖。「式家」は、宇合が式部卿の官職にあったことに由来。
●717年に遣唐使の副使として入唐。724年、持節大将軍として陸奥の蝦夷の反乱を平定。731年、参議。
●最終官位は、正三位・参議式部卿兼大宰帥。737年、天然痘の流行により、兄弟の中で最後に死亡。

藤原麻呂

【ふじわらのまろ】（695～737）

●藤原不比等の四男。「藤原京家」の祖。「京家」は、麻呂が京職大夫だったことに由来。
●731年、兄の宇合とともに参議に任ぜられ、兵部卿を兼ねる。
●最終官位は、従三位・参議兵部卿。737年、天然痘にかかり死亡。

［蝦夷］

〈えみし〉

古代の東北を中心に居住していた人々。中央集権体制の樹立をめざす朝廷によって、支配の対象とされた。奈良時代の東北には、陸奥・出羽の2国が置かれ、蝦夷征討軍の基地として、多賀城などの城柵が設けられた。

［隼人］

〈はやと〉

古代の九州南部に先住した人々。蝦夷と共に支配の対象とされた。713年に大隅国が設置されたあとも、隼人はしばしば反乱を起こしたが、721年の大伴旅人による征討後は完全に朝廷に服属した。

［天平大地震］

〈てんぴょうおおじしん〉

734年5月、畿内七道を中心に発生した地震。マグニチュード7.0と推定。生駒断層直下型。死者多数。

［公卿］

〈くぎょう〉

中国の高官の総称である「三公九卿」にならって、太政大臣、左大臣・右大臣を「公」、三位以上の貴人や参議の官にある者を「卿」といい、両者を併せて「公卿」と呼んだ。

第3章　藤原広嗣の乱

〈橘諸兄〉　～国難を乗り切り長期政権～

天然痘の大流行により藤原四兄弟が相次いで亡くなり、光明皇后の異父兄にあたる橘諸兄に、思いがけず政権を主導する立場が転がりこんできました。諸兄はこの国難を乗り切るために、下級氏族である吉備真備や玄昉などを登用するという思い切った策を講じます。このことが大きな波紋を呼ぶことになったのです。

棚ボタ政権 ?!

諸兄は、元は葛城王という皇族でしたが、母の橘姓を継いで橘諸兄と名乗り、藤原四子政権の下では、従三位参議として政権の一端を担っていました。

737年、藤原四子ら政府首脳が相次いで天然痘に倒れ、閣僚として残ったのは、橘諸兄と鈴鹿王、大伴道足の3人の参議だけでした。頼りにしていた兄たちを失った光明皇后は途方に暮れていましたが、「私に任せて」と言ってくれたもう一人の兄、橘諸兄に政権を委ねることにしたのです。そこで朝廷では急遽、橘諸兄を大納言に、鈴鹿王を知太政官事に任命し、政権としての体裁を整えました。

54歳の諸兄にとっては、まさに「棚からボタ餅」、降って湧いたような政権交代劇だといえるでしょう。

［橘諸兄］
天然痘の大流行によって甚大な被害が出た今、律令体制の保持と、災害からの復興という2つの課題に取り組むには、これまでの慣習に縛られていてはダメだ。
聞くところによると、中国では家柄や国籍を問わず優秀な人材はドシドシ登用し、国政に力を発揮させているそうじゃ。ここはひとつわが国も、中国の方式にならい、思い切った人材登用によって、この難局を乗り切ることにしよう。

人材の登用

諸兄は翌738年、右大臣に昇進し、留学帰りの吉備真備と僧玄昉を登用し、大陸の新知識を持った彼らに国政改革を託しました。真備は地方出身の下級役人でしたが、博識な学者で聖武天皇、光明皇后のお気に入りとなり異例の出世を遂げていました。また玄昉は唐の玄宗皇帝に才能を認められた逸材で、聖武天皇の生母・藤原宮子の病気を祈祷により回復させ、天皇の信頼を得ていたのです。

諸兄政権は、兵士役の停止や、中央で使役された仕丁が帰国する際の食料支給など、公民の負担軽減を図る政策を打ち出し、また荒廃した耕地を再開発させるために墾田永年私財法を発布しました。さらに支出抑制のために地方行政を簡素化するなどの改革を展開しました。

［吉備真備］
下級氏族の我々には、これまで唐で学んだことを生かす機会がなかなかありませんでした。しかし、この非常時のおかげで、良い政策であれば、身分の隔てなく採用していただけることは、とてもやりがいのあることです。これを契機に、いたずらに権力争いをするのでなく、純粋に法の下で政治が行われる国にしていきたいものです。

藤原広嗣の反乱

一方で、真備や玄昉らの登用に不満を露わにする人々もいました。藤原広嗣もその一人でした。藤原宇合の長男の広嗣はもともと横柄な言動が多く、政務がスムーズに進みませんでした。そこで諸兄は、親族への誹謗を理由に738年、広嗣を大宰府に左遷しました。

すると広嗣は、これを不服として740年、真備・玄昉の排除および諸兄の退陣を要求する上表文を聖武天皇に送ったのです。

登場人物紹介 ／ 用語解説

橘諸兄
【たちばなのもろえ】(684～757)

●敏達天皇の後裔の美努王の子。もとの名は葛城王。母は県犬養橘三千代。光明皇后の異父兄。
●731年、藤原宇合、藤原麻呂とともに参議。
●736年、臣籍に下り、橘諸兄と称す。
●738年、阿倍内親王の立太子と同時に右大臣就任。743年、左大臣に昇進。749年、正一位に叙される。

吉備真備
【きびのまきび】(695～775)

●備中国下道郡(現岡山県倉敷市吉備町)出身。下道真備(しもつみちのまきび)とも呼ばれる。
●717年、留学生として入唐。735年に帰国し、橘諸兄に登用され、皇太子の学士等を務める。
●藤原仲麻呂が実権を握ると九州に左遷され、さらに752年、遣唐副使として再入唐。翌年、鑑真を連れて帰国。
●恵美押勝の乱の鎮圧に大きな役割を果たし、道鏡政権下で右大臣に就任。最終官位は、正二位・右大臣。

玄昉
【げんぼう】(生年不詳～746)

●義淵に師事し、717年、学問僧として入唐。735年に帰国し、唐での実績を認められ、737年、僧正に任じられる。
●心的障害により長く患っていた藤原宮子(聖武天皇の生母)を、祈祷によって平癒させ、天皇の信任を得る。
●橘諸兄によって登用され出世したが、人格に対しての批判が強く、藤原広嗣の乱の一因となる。
●藤原仲麻呂が実権を握ると、筑紫観世音寺別当に左遷され、746年、任地で死去。

鈴鹿王
【すずかおう／すずかのおおきみ】(生年不詳～745)

●天武天皇の長男・高市皇子の次男。長屋王の異母弟。
●知太政官事に就任し、橘諸兄とともに政権を運営した。

大伴道足
【おおとものみちたり】(生年不詳～741?)

●壬申の乱で活躍した大伴馬来田(まぐた)の子。704年に従五位下に昇ったのち、讃岐守、民部大輔などを歴任。
●729年に起こった長屋王の変の直後、臨時の参議となり、大伴旅人の死後、正式に参議に任ぜられた。

玄宗皇帝
【げんそうこうてい】(685～762／在位 712～756)

●唐の第6代皇帝。
●治世の前半は「開元の治」と呼ばれる善政で唐の絶頂期を迎えたが、後半(740年～)は楊貴妃を寵愛したことで安史の乱の原因を作った。

藤原宮子
【ふじわらのみやこ】(生年不詳～754)

●藤原不比等の長女で、文武天皇の夫人。聖武天皇の母。
●聖武天皇を出産後、心的障害を患い長期間外に出ることはなかったが、737年、玄昉の祈祷により回復し、36年ぶりに天皇と対面した。

[仕丁]
〈じちょう／しちょう〉

成年男子に課せられた古代の力役。50戸に2人の割合で選抜され、中央官庁および親王家・大臣家などの雑役に従事した。当初、就役年限に規定はなかったが、722年に3年と定められた。

[墾田永年私財法]
〈こんでんえいねんしざいのほう〉

743年発布。三世一身法に代わって、墾田の永久私有を認めた法令。墾田は原則として輸租田(租税納入の対象)であったので、この法令は、開墾意欲を向上させ税収の増加を図る政策だとも考えられる。のちの「荘園」発生の契機となった。

藤原広嗣
【ふじわらのひろつぐ】(生年不詳～740)

●藤原宇合の長男。
●藤原四子政権崩壊後その再建を目指したが、彼の行動は急進的で橘諸兄政権と対立し、大宰府に左遷される。
●740年に玄昉、吉備真備の排除を求め挙兵する(藤原広嗣の乱)が、失敗に終わった。

（～続き） 第3章　藤原広嗣の乱

‹橘諸兄› ～国難を乗り切り長期政権～

［藤原広嗣］
真備や玄昉のような下級氏族が都で大きな顔をし、名門・藤原式家の嫡男である俺が九州でくすぶっているのは、どういうわけだ。これは明らかに政治が間違っている。疫病や地震などの災いが続いたのもそのせいだ。藤原氏をないがしろにして、この国の政治ができるとは思えん。天皇には是非考え直していただきたいものだ。

ところがこの要望は受け入れられず、広嗣は弟の綱手らとともに大宰府で挙兵しました。この知らせを聞いた政府は直ちに征討軍を派遣しましたが、広嗣の反乱は約2ヶ月に及びました。そして、大野東人を大将軍とする追討軍が、ようやくこれを鎮圧したのです。

大仏造立の詔

藤原広嗣の乱は鎮圧されましたが、聖武天皇の心は安まりません。地震、飢饉、疫病そして反乱と相次ぐ災いに、聖武天皇は統治者として国をどう治めていくべきか、深く悩んでおられました。

そこで橘諸兄は、「気分転換に」と自分の別邸がある山背国相楽の地に天皇を招きました。そして740年末、天皇は木津川左岸に造営された離宮に遷り、翌年から「恭仁京」建設が開始されました。

聖武天皇は、仏に守護された新しい都を造ろうと考え、行基に会って「大仏造立構想」を打ち明けるとともに、それへの協力を依頼しました。これを知った私・仲麻呂は、藤原氏ゆかりの地である近江国ならば大仏造立をスムーズに進められることを天皇に申し上げたのです。すると天皇は、大仏造立の地を求めて紫香楽離宮に行幸しました。

そして743年、天下泰平を願って「大仏造立の詔」が発表されました。

［聖武天皇］
地震や飢饉の続発によって民は苦しみ、疫病がはやって藤原四兄弟を始めとする多くの人材を失い、ついには、信頼をおいていた藤原氏の中から反乱が起こるなど、世の中は大いに乱れている。
これらはひとえに朕の政治が悪いからである。朕は天皇として何をすればよいのだろうか。平時であれば、国は律令によって束ねていける。しかし、このような非常事態では、精神的な支えとなってくれる大きな存在が必要だ。
そこで朕は仏の力にすがろうと思う。仏教によって心の平安をもたらし、平和な国家を造るのだ。

度重なる遷都

紫香楽の地での大仏造立を決めた聖武天皇は、恭仁京建設を中止し、紫香楽宮への行幸を繰り返します。ところが744年に天皇は病気がちとなり、天皇としての職務がとれなくなりました。そこで諸兄は、元正上皇に天皇代行を依頼するとともに、非藤原氏系の安積親王の擁立を画策しました。そして、交通の要衝でもある難波宮への天皇、皇后の行幸を実現し、上皇が天皇代行として難波京遷都の勅を発しました。

しかし恭仁京に残っていた安積親王が急死する事件が起こると、聖武天皇は「大仏造立に専念する」と宣言し、紫香楽宮へ戻ってしまいます。甲賀寺で大仏造立が開始され、元正上皇も難波宮から紫香楽宮に遷りました。事実上の紫香楽遷都となったのです。

ところがその後、紫香楽宮周辺で山火事や地震が頻発し、天皇は平城京への還都を決断しました。それとともに大仏造営事業も大和国分寺(のちの東大寺)に移されることになりました。

5年にわたり遷都を繰り返した混乱劇は一件落着し、藤原氏との主導権争いも一段落して、橘諸兄政権は継続されることになったのです。

登場人物紹介 ／ 用語解説

藤原綱手

【ふじわらのつなて】（生年不詳～740）

●藤原宇合の4男あるいは5男。藤原広嗣の異母弟。　●藤原広嗣の乱に加わり、誅殺された。

［恭仁京］

〈くにきょう〉

740年の藤原広嗣の乱後、橘諸兄のすすめで聖武天皇が遷した都。現在の京都府木津川市付近にあたる。

行基

【ぎょうき】（668～749）

●河内国大鳥郡(現大阪府堺市)出身。渡来系氏族の子孫と伝えられる。
●道昭に師事してその影響を受け、社会福祉活動を通じた一般民衆への布教を行い、政府から弾圧される。
●聖武天皇の依頼を受けて大仏造立の勧進を行い、745年、日本で最初の大僧正に任命される。

［紫香楽宮］

〈しがらきのみや〉

恭仁京遷都後に行幸を繰り返した離宮。現在の滋賀県信楽町にあたる。

安積親王

【あさかしんのう】（生年不詳～762）

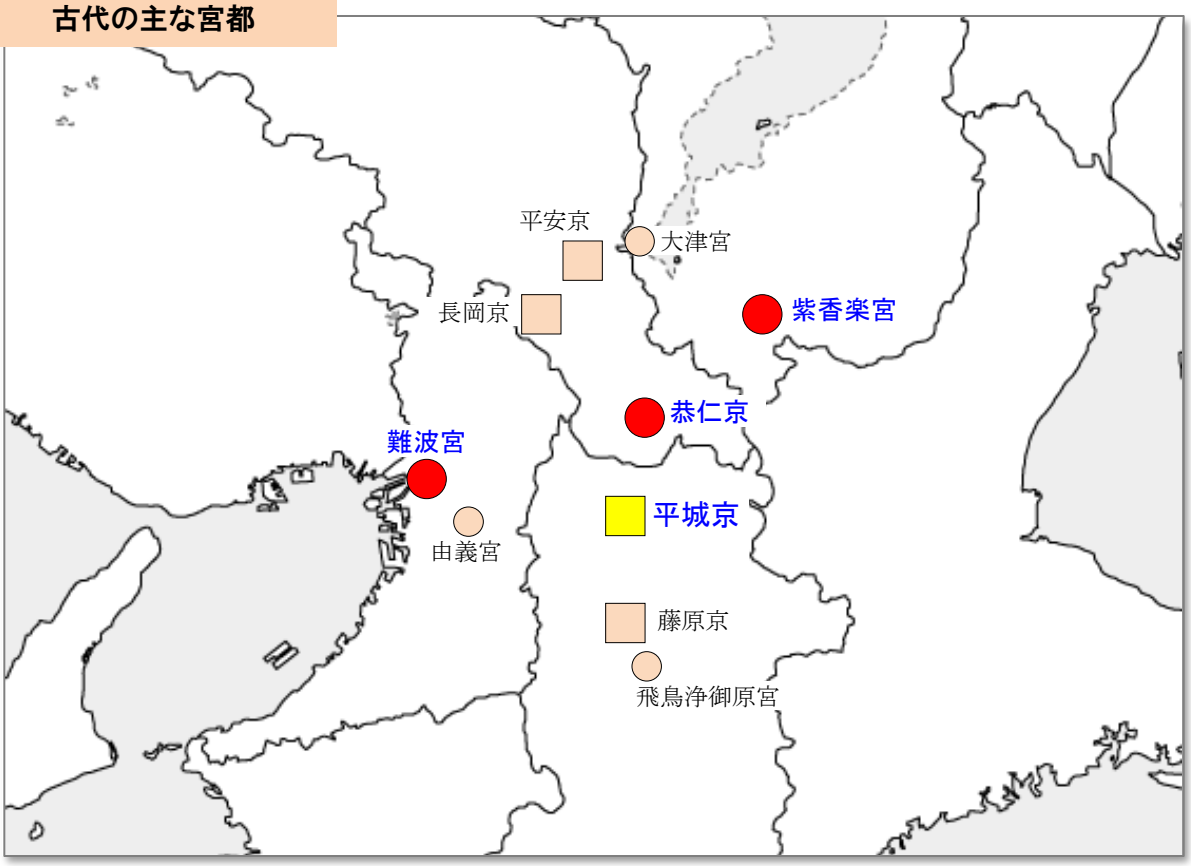
●聖武天皇の第二皇子。母は県犬養広刀自（あがたのいぬかいのひろとじ）。
●異母兄の基皇子が亡くなったあと、聖武天皇唯一の皇子として、後継天皇の有力な候補となったが、難波宮遷都の際、恭仁京において急死。藤原仲麻呂による毒殺という説もある。

［難波宮］

〈なにわのみや〉

●726年、聖武天皇が藤原宇合に命じて造営させ、平城京の副都とした。現在の大阪市中央区にあたる。
●744年に恭仁京から遷都されたが、翌年、紫香楽宮に遷都した。
●784年の長岡京遷都の際、大極殿などの建物が長岡京に移築された。

古代の主な宮都



（～続き） 第3章　藤原広嗣の乱　<橘諸兄> ～国難を乗り切り長期政権～

［橘諸兄］
藤原広嗣の乱をきっかけに聖武天皇の心が揺れ動き、大仏造立にふさわしい場所を探しもとめて都を転々としたが、「やっぱり平城京だ」と落ち着いた、というところだろうか。
藤原仲麻呂が光明皇后に取り入って、あれこれと動き回っていたのは知っている。しかし、私も皇后の兄として負けるわけにはいかんのじゃ。

鎮護国家の実現

再び都となった平城京で、仏教に護られた国づくりが着々と進められていきました。国分寺・国分尼寺が全国に建立され、その本山として総国分寺に位置づけられた東大寺では、この世のすべての生命あるものを光で満たすという祈りが込められた盧舎那大仏の造立が進められました。

749年、聖武天皇は孝謙天皇に譲位し、光明皇太后が天皇の後見役となりました。そして私・仲麻呂が皇太后のために設置した紫微中台の長官として、さらにその補佐をしたのです。

そして752年に大仏が完成し、4月に大仏開眼供養会が盛大に開催されました。大仏造立は聖武上皇、光明皇太后の悲願であり、うち続く国難を乗り越えて復活した日本を象徴する一大イベントでもありました。橘諸兄は政界を代表する左大臣としてこの大事業を成し遂げました。

こうして、仏教によって国を護るという鎮護国家の思想が現実のものとなったのです。

［光明皇太后］
聖武天皇は、大仏造立の詔の中で、「一握りの土、一枝の草を持ち寄って、みんなの力で大仏を造ろう」と呼びかけました。大仏を権力によって造るのではなく、一人一人の力を結集して造ることで、人々の心を一つにまとめようとされたのです。
仏教の力で人々をつなぐことで、国は元気を取り戻し、平和な世界がもたらされると強く信じていたのです。
そんな天皇をよく支えてくれたのが橘諸兄でした。
遷都を繰り返す間もよく国を守り、大仏造立という莫大な費用を要する大事業も成功させました。苦しい時代を共に切り抜けてきた兄に、私はとても感謝しています。

橘諸兄の引退

橘諸兄は、743年に左大臣となり、749年に正一位に叙せられました。生前に正一位に叙せられたのは、藤原宮子に次いで2人目で、政治家としては初めてのことでした。光明皇后の兄という立場だったからこそ掴んだ権力の座でしたが、思い切った人材登用によって政界の難局を乗り切り、遷都を繰り返す聖武天皇を理解し支え、大仏造立という大事業を成し遂げた功績は非常に大きなものだといえるでしょう。

ところが755年、酒の席とはいえ、聖武上皇の病気に関して諸兄は不敬な発言をしたのです。 彼の功績に配慮して穏やかに忠告すると、諸兄は翌年2月に辞職を申し出て政界を引退しました。

振り返れば737年から足かけ20年間にわたる長期政権でした。そして引退から1年後の757年1月、聖武上皇のあとを追うように、74歳の生涯を閉じたのです。

登場人物紹介 ／ 用語解説

孝謙天皇

【こうけんてんのう】(718～770／在位 749～758)

- 聖武天皇と光明皇后の娘。阿倍内親王。第46代天皇。
- 一旦退位したのち重祚し、称徳天皇となる。『続日本紀』では、終始「高野天皇」と呼ばれている。
- 孝謙天皇在位中の実権は、母の光明皇太后と紫微中台長官の藤原仲麻呂が事実上掌握していた。

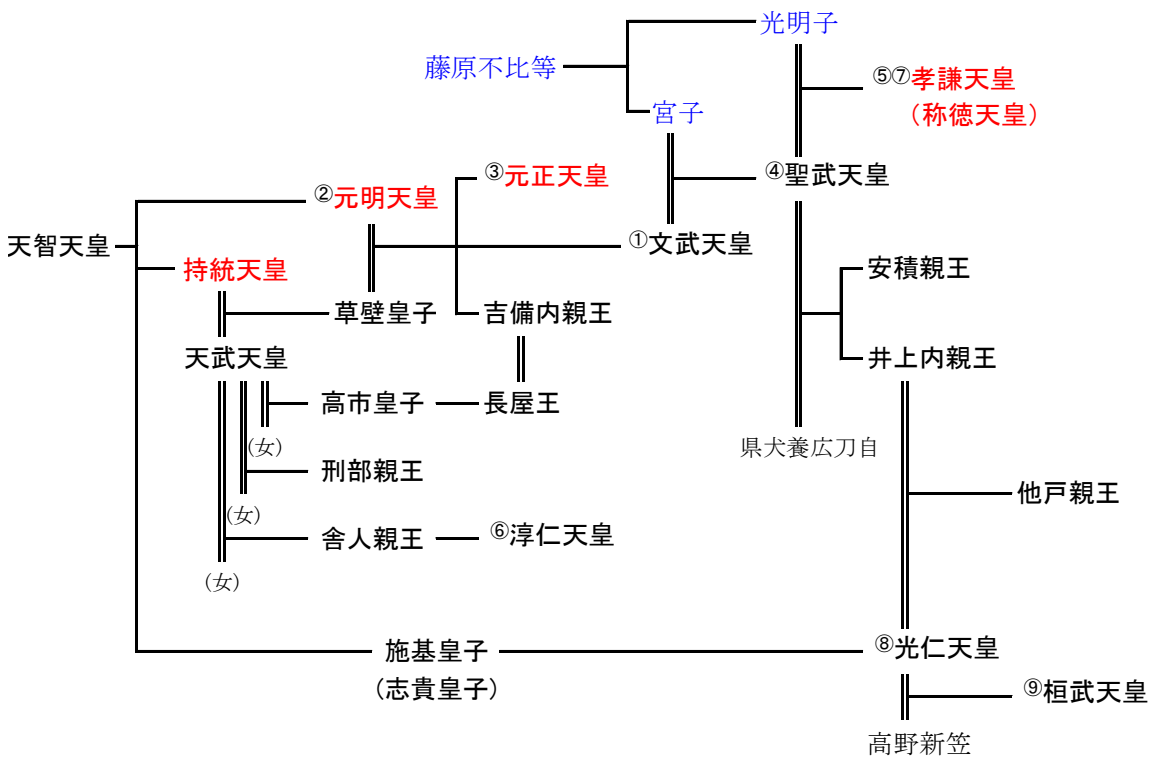
[紫微中台]

〈しびちゅうだい〉

藤原仲麻呂が749年に創設した光明皇太后の家政機関。藤原仲麻呂が長官となり、権力を手中に納めた。

奈良時代の皇室関係図

数字は文武天皇以降の即位順
赤字は女性天皇



第4章　養老律令の施行

〈恵美押勝〉　～律令の完成をめざす～

大仏開眼供養会を盛大に開催し、わが国が唐と肩を並べられる国家に成長したことを世界に宣言しましたが、本当の意味での律令国家の確立には、まだまだ改革が必要でした。私は、祖父の不比等が手がけた養老律令の編纂事業を再開し、それを施行することで律令制度の完成をめざしたのです。

藤原仲麻呂の台頭

749年、阿倍内親王が即位して孝謙天皇となると、私・藤原仲麻呂は参議から一気に大納言に昇進しました。光明皇太后のために創設した紫微中台の長官を兼ねて、光明皇太后と孝謙天皇の信任を得て、政治への影響力としては左大臣・橘諸兄を上回る実力を手に入れました。

［孝謙天皇］
母の光明皇太后は、藤原仲麻呂に信頼を寄せていましたので、紫微中台という役職を新設して、仲麻呂をその長官に任じました。母は私の後見役として地位を確保するとともに、仲麻呂には自分の補佐役として大きな権力を与えようとしたのでしょう。
仲麻呂は頼りがいのある素晴らしい人物で、私も心強い。ただ、あまりにも早い出世を妬む声も聞こえてくるのが、ちょっと心配です。

吉備真備の役割

橘諸兄によって登用された吉備真備は、東宮学士として皇太子時代の阿倍内親王に学問を教授し、聖武天皇、光明皇后、阿倍内親王の寵愛を受けて順調に昇進していました。しかし阿倍内親王が孝謙天皇となり、彼の役割も終わりました。そして東大寺の大仏の完成が近づき、そのことを中国にも伝える必要があります。また前回の遣唐使から15年がたち、そろそろ新たな情報を入手することも必要です。そこで入唐経験のある吉備真備に再び中国に行ってもらおうと考え、まずは750年、真備を筑前守として九州に下向させてその準備にあたらせました。翌年、藤原清河を遣唐大使とし、大伴古麻呂と吉備真備を副使に任命して唐に渡ってもらいました。

真備は、717年の遣唐使で真備とともに入唐しそのまま唐朝に仕えていた阿倍仲麻呂に再会し、753年、彼を連れて帰国の途につきました。ところが、藤原清河と阿倍仲麻呂を乗せた船は嵐に遭ってベトナム方面に流され、彼らは2年後ようやく長安に帰着し、結局日本に帰国することはできませんでした。一方真備は、大伴古麻呂とともに鑑真を連れて753年末に帰国したのです。

鑑真招聘の功績により、真備には外交上の重要職である大宰府の次官に就いてもらいました。また755年に唐で安史の乱がおこり、日本への影響も心配されましたので、真備にはその防備の役割もお願いしたのです。

橘奈良麻呂の乱

756年5月に聖武上皇が崩御されました。上皇の遺言により道祖王が立太子されていましたが、757年4月に孝謙天皇の不興を受けて皇太子を廃されましたので、私は舎人親王の子・大炊王を皇太子に推薦しました。

また翌5月には、祖父・不比等が手がけた養老律令を施行し、本格的に政治改革を開始したのです。こうした私の政治に不満を持つ橘奈良麻呂らは、同調者を集めて反乱を起こそうと画策しました。

登場人物紹介 ／ 用語解説

藤原清河

【ふじわらのきよかわ】（生年不詳～778）

●藤原房前の四男。752年、遣唐大使として唐に渡る。帰国の船が難破し、中国でその生涯を終えた。

大伴古麻呂

【おおとものこまろ】（生年不詳～757）

●奈良時代の中級官人。『万葉集』を根拠に、大伴家持の従兄弟とする説がある。
●752年、遣唐副使として藤原清河とともに入唐。朝賀の席で新羅と席次を争い、上席を勝ち取った逸話が残る。

阿倍仲麻呂

【あべのなかまろ】（698～770）

●717年に留学生として入唐、科挙に合格し「朝衡(ちょうこう)」の名で玄宗皇帝に仕える。
●学識と文才は世に聞こえ、王維、李白らと交遊する。

鑑真

【がんじん】（688～763）

●唐の高僧で、栄叡、普照の招請に応え、授戒師として渡日することを決意。
●5回の渡航失敗によって失明したが、苦難を乗り越えて、753年に来日。
●東大寺戒壇院において戒律の普及に努めたのち、759年、唐招提寺を創建。

［安史の乱］

〈あんしのらん〉

唐の中期、755年から763年にかけて、安禄山やその部下であった史思明らによって引き起こされた大規模な反乱。玄宗皇帝が楊貴妃を寵愛し、政治が堕落したことが原因とされる。

道祖王

【ふなどおう】（生年不詳～757）

●父は新田部親王。祖父は天武天皇。
●聖武上皇の喪中に不貞な行動があったとして、孝謙天皇の不興を買い、皇太子を廃される。
●橘奈良麻呂の乱に関与したとして逮捕され、厳しい拷問を受けて獄死した。

大炊王

【おおいおう】（733～765）

●舎人親王の七男。道祖王に代わって立太子され、のち淳仁天皇となる。
●藤原仲麻呂の私邸に暮らし、仲麻呂と強く結びついていた。

橘奈良麻呂

【たちばなのならまろ】（721～757）

●父は橘諸兄。母は藤原不比等の娘。
●749年に参議となる。
● 757年の父の死後、藤原仲麻呂の専横に対する不満を強くし、大伴古麻呂、小野東人らと共謀して仲麻呂の排除を画策するが、山背王の密告により逮捕され、獄死。

（～続き） 第4章　養老律令の施行

<恵美押勝>　～律令の完成をめざす～

［橘奈良麻呂］
聖武上皇が道祖王を後継者に指名されたのに、仲麻呂は孝謙天皇を言い含めて道祖王を廃し、自分に近しい大炊王を皇太子に立てた。彼が天皇になれば、仲麻呂はますます自分の思いのままに政治を進めるようになるだろう。これ以上仲麻呂の専横を許すわけにはいかん。彼に不満を持つ大伴氏や佐伯氏など古くからの氏族たちとともに立ち上がるのだ！

山背王(長屋王の子)らの密告により事件は発覚しました。そしてこの橘奈良麻呂の乱は、奈良麻呂のほか、道祖王、大伴古麻呂、小野東人、佐伯全成ら400人以上が処罰される大事件に発展し、また兄の藤原豊成もこれに関与していることがわかって、右大臣の職を罷免されました。これによって、私は太政官の首座となり、名実ともに最高権力者となったのです。

淳仁天皇の即位と唐風政治の推進

橘奈良麻呂の乱により、私・仲麻呂への反対派は一掃され、 758年に大炊王が即位し、淳仁天皇となりました。依然として光明皇太后が強い影響力を持つ中、私は養老律令を基本に、官名を中国風に改める唐風政策を推進し、天皇から「恵美押勝」という名を賜って、藤原恵美押勝と名乗るようになりました。恵美家の私印を公式文書に使用することや、貨幣を私的に鋳造することなどの特権を与えられ、760年には皇族以外では初となる大師(太政大臣)の位も賜ったのです。

［光明皇太后］
奈良時代を通じて目指してきた律令国家体制の確立は、仲麻呂の政権下で完成をみたと言えるでしょう。彼は、税負担の軽減、庶民の意思を政治に反映させるための問民苦使の派遣、地方から税を運んでくる運脚夫への食糧支給など、徳の高い政治を行いました。また私の父で、仲麻呂には祖父にあたる藤原不比等が編纂した養老律令を施行することで、藤原氏が律令国家の主導者であることを明示しました。
子供の頃から賢くて、書物をよく読んでいた仲麻呂。娘の孝謙天皇をしっかりと支えてくれる後ろ盾として、また藤原一族を代表するにふさわしい人物として、私は彼を見込んだのです。その期待に仲麻呂は見事に応えてくれました。

登場人物紹介 ／ 用語解説

山背王

【やましろおう】（生年不詳～763）

- 長屋王と藤原長我子(ながこ)の子。のちに臣籍降下し、藤原弟貞(おとさだ)と名乗る。
- 長屋王の変に際しては、母が不比等の娘であったため罪を免れる。
- 橘奈良麻呂の謀反を密告して、従三位に叙せられ、のち参議となる。

小野東人

【おののあずまひと】（生年不詳～757）

- 藤原広嗣の乱に加って、741年、伊豆国三島(伊豆大島)に配流。
- 746年に政界復帰したが、757年、橘奈良麻呂の乱に加わって逮捕され、獄死。

佐伯全成

【さえきのまたなり】（生年不詳～757）

- 陸奥国司として、大仏に使用する黄金を都に運ぶ業務に携わる。
- 橘奈良麻呂から三度にわたり、謀反への参加を呼びかけられたが、拒否していた。
- 橘奈良麻呂の乱が発覚すると関係者として逮捕され、奈良麻呂の謀反を証言したのち、自殺。

藤原豊成

【ふじわらのとよなり】（704～766）

- 藤原武智麻呂の長男。藤原仲麻呂の同母兄。
- 749年に右大臣。757年の橘奈良麻呂の乱に関与したとされ、右大臣を罷免され、大宰府に左遷。しかし、抗議の意味も込めて、病気と称し難波の別荘に引きこもる。
- 764年の恵美押勝の乱後、右大臣として政権に復帰。

淳仁天皇

【じゅんにんてんのう】（733～765／在位 758～764）

- 舎人親王の七男。大炊王(おおいおう)。
- 第47代天皇。孝謙天皇から譲位を受けて即位。しかし実権は、光明皇太后と藤原仲麻呂が握る。
- 恵美押勝の乱後、廃位となり淡路に流罪。「淡路廃帝(あわじはいたい)」と呼ばれる。
- 廃位により歴代天皇に数えられていなかったが、1870年、明治天皇から「淳仁天皇」の追号を受けた。

［問民苦使］

〈もみくし／もんみんくんし〉

臨時に派遣された地方監察官。「民の苦しみを問う」ことを目的として、藤原仲麻呂が初めて派遣。唐の観風俗使に採訪処置使など監察を掌る諸使の要素を加えた、日本独自の役職とみられる。

第5章　道鏡事件

〈吉備真備〉　～「激動の奈良」を見届けた男～

私は律令の完成をめざした改革を進めていましたが、唐風政策や仏教よりも儒教を重視する考え方に異論を唱える者が出てきました。そんな中で僧道鏡が孝謙上皇に取り入り、鎮護国家を強調したのです。また、九州から吉備真備を呼び戻し、私との対決姿勢を強めたのです。

道鏡の台頭

760年に光明皇太后が亡くなられました。私・恵美押勝は彼女の後押しにより昇進してきましたが、今では大師の地位にあり、簡単にこの権力が揺らぐものではありませんでした。

ところが翌761年、孝謙上皇が行幸先の保良宮で病気になると、僧道鏡がその治療と称して上皇に近づき、上皇は道鏡を寵愛するようになってしまったのです。私が淳仁天皇を通じてそれをお諫めしたところ、上皇は激怒して出家し、次第に淳仁天皇や私との対立を深めていきました。

［道鏡］
私は学識を買われて宮廷の内道場に入り、そこで上皇様にお目にかかりました。
上皇様は天皇の時代から、政治のことは光明皇太后と恵美押勝に任せておられました。しかし、皇太后が亡くなられると、恵美押勝の専横が目立つようになりました。私が上皇様にお仕えするようになると、それはダメだと忠告する恵美押勝と、彼の言いなりになっている淳仁天皇にも不信感を持たれたのです。
上皇様は、恵美押勝の言いなりではなく、自ら政治に取り組むことを決心されたのです。私もできる限り励まし、お支えする覚悟です。

恵美押勝の乱

762年、孝謙上皇は「天皇は恒例の祭祀などの小事を行え。国家の大事と賞罰は自分が行う」と宣言し、翌年、寵愛する道鏡を少僧都に任命したのです。また吉備真備を造東大寺長官として平城京に呼び戻し、私・恵美押勝との対決姿勢を露わにしたのです。

道鏡の台頭に危機を感じた私は、764年9月、都に兵力を集めて軍事力で道鏡を排除しようとしました。ところが、そうした動きを知った孝謙上皇が、「恵美押勝一族の位階・官職および全財産の没収」を宣言したので、私たちは反乱者となってしまい、仕方なく都を脱出しました。そして上皇は吉備真備に私の誅伐を命じたのです。

［孝謙上皇］
恵美押勝はあまりにも天皇の権威をないがしろにしすぎている。淳仁天皇を思うままにあやつり、道具のように扱っている。このようなことになったのは、彼に任せきりにしてきた私の責任でもある。その責任をとるためにも、私は自分自身の手で、押勝に奪われた権力を取り戻さなければならない。
かつて人の上に立つ者のあり方を教えてくれた吉備真備を呼び戻したのも、私が飾り物の上皇で終わらないための布石だったのだ。

真備は70歳になっていましたが、軍学の知識を買われての抜擢でした。真備率いる討伐軍に追い詰められた私は、琵琶湖に逃れようとしたところを捕えられてしまいました。

［恵美押勝］
すでに退位した上皇には何の力もないと、甘く見ていたことが誤算だった。それに同じ藤原の血を引いているので、まさかこの私を逆賊扱いにしようとは思わなかった。我々藤原氏が律令国家建設のために努力してきたことを、なぜわかっていただけなかったのか。まだまだ道半ばであるのに、残念でならない。なぜこのようなことになってしまったのか、自分でも信じられん！

登場人物紹介 ／ 用語解説

道鏡

【どうきょう】（生年不詳～772）

- 物部氏の一族の弓削氏の出身。弓削道鏡とも呼ばれる。
- 義淵の弟子となり、良弁から梵語(サンスクリット語)を学ぶ。禅に通じ、宮中の仏殿において禅師に列せられた。
- 762年、孝謙上皇の病気を宿曜秘法を用いて治療し、上皇の寵愛を受けるようになる。
- 764年の恵美押勝の乱後、重祚した称徳天皇の信任を背景に仏教政策を推進した。
- 770年、称徳天皇が没したあと下野薬師寺別当に左遷され、772年没。「庶人」として葬られた。

［保良宮］

〈ほらのみや〉

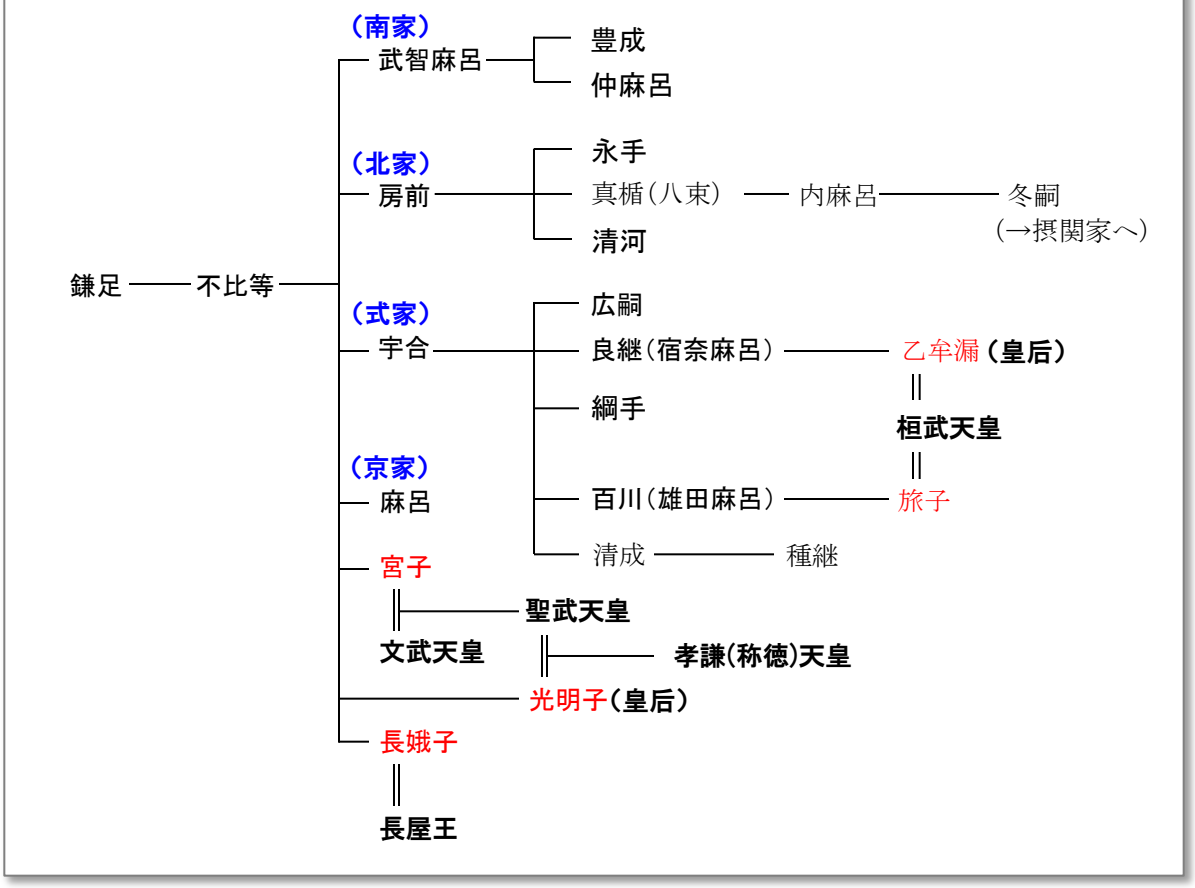
唐の陪都「北京太原府」にならって、平城京の北の都「北京(ほくきょう)」とされた。藤原仲麻呂の唐風政策の一環として、自身の基盤地である近江国に造営が進められたが、恵美押勝の乱で仲麻呂が敗退し、造営中止となった。大津市石山付近にあったとする説が有力だが、紫香楽宮近くの玉桂寺を宮跡だとする説もある。

［少僧都］

〈しょうそうず〉

律令制のもと、仏教界を統括する僧綱のうち、僧正に次ぐ位が僧都。僧都には「大僧都」と「少僧都」があった。役所である僧綱所は、奈良時代には薬師寺に置かれ、僧正、大僧都、少僧都、律師で組織されていた。

藤原氏関係系図



（～続き） 第5章　道鏡事件

‹吉備真備›　～「激動の奈良」を見届けた男～

称徳天皇の政治

恵美押勝の乱後、淳仁天皇は廃位となり淡路国に流され、代わって孝謙上皇が重祚して称徳天皇となりました。

天皇は道鏡を恵美押勝に代わって太政大臣禅師に任命し、翌年法王の位につけて仏教の理念に基づいた政策を推進しました。吉備真備は、称徳政権の下で中納言、大納言、右大臣と順調に出世し、また、妹の吉備由利も称徳天皇の側近として召されるなど信頼を得ていました。

一方で道鏡の弟の弓削浄人が大納言に昇進したのをはじめ、一門の者の多くが異例の昇進をしたことや、道鏡が法体で政務に参与したことに対し、藤原氏らが不満を高めていきました。

［吉備真備］
称徳天皇は道鏡を寵愛されましたが、政治には直接関わらせず、私たちの意見を尊重して下さいました。今振り返ってみれば、仏教の大事業が少々財政を圧迫してはいたものの、経済は豊かでした。
私は結果として藤原仲麻呂と敵対したようになりましたが、彼は立派な政治家だと評価しています。彼が律令制度を確立してくれたおかげで、私のような下級身分の者にも出世の道が開かれ、有能な人材が登用されて、日本は今日のように豊かになれたのです。
これから先、また権力争いがあったとしても、法の下で国家が運営される仕組みさえしっかりしていれば、人々の暮らしは守られます。この素晴らしい仕組みは、これからもずっと生き続けていくことでしょう。

宇佐八幡宮神託事件

女帝の称徳天皇は独身で子供がおらず、「皇太子はふさわしい人物が現れるまで決められない」と言われたので、皇位継承をめぐってトラブルが続発し、政情が不安定となっていました。

そのような中、769年に大宰府の長官となった弓削浄人と大宰主神・習宜阿曾麻呂が「道鏡を皇位に就ければ、天下は泰平になる」という内容の宇佐八幡宮の神託を天皇に奏上しました。喜んだ称徳天皇はその神託の真偽を確認させるため、側近の法均尼(和気広虫)の弟の和気清麻呂を宇佐に派遣したのです。

［称徳天皇］
朕は、父の聖武天皇や母の光明皇后が情熱を注いだ、「仏教によって国を治める」という方針を受け継いでいる。仏教で国を治めるのだから、仏の教えによく通じている者が天皇となるのが望ましい。
朕は、法王の地位にあり徳の高い道鏡こそが、天皇になるのにふさわしい人物だと思っている。

ところが和気清麻呂は、「天の日継は必ず帝の氏を継がしめむ。無道の人は宜しく早く掃い除くべし」という神託を持ち帰りました。道鏡を皇位に就けたいと願っていた天皇は、清麻呂の報告を聞いて激怒しました。清麻呂は因幡国に左遷され、さらに「別部穢麻呂(わけべのきたなまろ)」と改名させられて大隅国に流罪となりました。また、姉の法均尼も還俗のうえ「別部狭虫(さむし)」と改名させられて、備後国に流されました。

［和気清麻呂］
称徳天皇の願いとはいえ、皇族以外の者が皇位に就くことは、王統の変更を意味します。私の報告次第では、ここまで続いてきた天皇家を消し去ることになるのです。そんなことはできるはずがありません。
たとえ天皇の怒りを買おうとも、国の根幹を曲げる訳にはいかないのです。

登場人物紹介 ／ 用語解説

[重祚]

〈ちょうそ〉

退位した天皇が再び皇位につくこと。飛鳥時代に皇極天皇が重祚して斉明天皇となり、奈良時代に孝謙天皇が重祚して称徳天皇となった2例がある。

称徳天皇

【しょうとくてんのう】（718～770／在位 764～770）

- 第48代天皇。764年、孝謙上皇が重祚して即位。
- 道鏡を重用し、仏教政策を推進。宇佐八幡宮神託事件で皇室および政界に大きな混乱を招く。

吉備由利

【きびのゆり】（生年不詳～774）

- 吉備真備の妹。称徳天皇の信頼を得、兄とともに側近として仕えた。
- 称徳天皇の病臥後、天皇が没するまで、ただ一人寝所に出入りを許され、群臣との取り次ぎを務めた。

弓削浄人

【ゆげのきよひと】（生没年不詳）

- 道鏡の弟。道鏡政権のもとで急速に昇進し、768年に大納言。
- 769年、大宰帥(長官)となり、「道鏡を皇位に就ける」旨の宇佐八幡宮の神託を上奏。
- 770年、道鏡とともに失脚し、土佐国に流罪。

習宜阿曾麻呂

【すげのあそまろ】（生没年不詳）

- 769年、大宰主神(だざいのかんつかさ)の時、「道鏡を皇位に就ける」旨の宇佐八幡宮の神託を奏上。
- 770年、道鏡の失脚とともに、多褫嶋(多禰島)守(たねのしまのかみ)に左遷。

[宇佐八幡宮]

〈うさはちまんぐう〉

大分県宇佐市にある神社で、全国44,000社と言われる八幡宮の総本宮。正式名は宇佐神宮。
応神天皇を「八幡神」とし、比売大神、神功皇后(応神の母)と合わせて「八幡三神」と呼んで主祭神として祀る。
伊勢神宮の天照皇大神(アマテラス)に次ぐ、皇室の守護神とされていた。
石清水八幡宮(京都府八幡市)、筥崎宮(福岡県福岡市)、または筥崎宮に代えて、格下の鶴岡八幡宮(神奈川県鎌倉市)とともに日本三大八幡宮の一つに数えられる。

和気広虫

【わけのひろむし】（730～799）

- 和気清麻呂の姉。広虫売(ひろむしめ)とも称される。
- 孝謙上皇に仕え、上皇に従って出家し「法均尼」と号した。
- 恵美押勝の乱の際、逆徒の助命嘆願をするとともに、多数の孤児を引き取り養育した。
- 宇佐八幡宮神託事件により備後国に流されたが、光仁天皇即位により、帰洛を許された。

和気清麻呂

【わけのきよまろ】（733～799）

- 備前国藤野郡(現岡山県和気町)の出身。
- 宇佐八幡宮神託事件により大隅国に流されたが、光仁天皇によって召還される。
- 桓武朝では実務官僚として重用され、平安京遷都を進言し、造営大夫として尽力した。

（～続き） 第5章　道鏡事件　‹吉備真備› ～「激動の奈良」を見届けた男～

後継天皇の行方

770年、称徳天皇は道鏡の故郷にある由義宮に行幸しましたが、ここで発病し床に伏せります。この時、左大臣・藤原永手と右大臣・吉備真備は、道鏡を天皇に近づけず、看病のために付き添ったのは吉備由利ただ一人でした。

天皇の後ろ盾を失った道鏡の権力は急激に衰え、称徳天皇が崩御されると、道鏡は下野薬師寺別当に左遷、弓削浄人も土佐に流罪となりました。

天皇の後継問題については、称徳天皇の異母姉・井上内親王と白壁王との間の子・他戸親王が、外孫ながら聖武天皇の唯一の血筋であることから、幼少の他戸親王を皇太子とし、彼へのつなぎとして父の白壁王が62歳で即位(史上最高齢での即位)し、光仁天皇となりました。

ところが、771年2月に藤原永手が死去、3月に吉備真備が政界を引退して、政治の主導権を藤原式家の良継と百川の兄弟が握るようになると、彼らは皇太子の異母兄にあたる山部親王(のちの桓武天皇)の立太子を画策します。そして翌772年、天皇呪詛の嫌疑で井上内親王が皇后位を廃され、他戸親王も皇太子を廃される事件が起こりました。井上内親王と他戸親王は775年に幽閉先で亡くなり、天武天皇系の皇族は途絶えてしまいました。

こうした「激動の奈良」の政治史を見届けるように、吉備真備も同年10月に80年の人生の幕を閉じたのです。

［藤原百川］
私は幼少の他戸親王よりも、すでに30代半ばの山部親王の方が天皇にふさわしいと考えていた。
母君の高野新笠は渡来系氏族の出身で、身分は低いのだが、そこで育った山部親王には、優れた国際感覚や学識が身についておられるのだ。
彼は、天皇を中心とした律令国家体制を建て直したいという強い意志と、それを実現できるだけの能力をお持ちだ。その山部親王に天皇となっていただき、我ら藤原氏も新たな道を切り開くのだ。

長岡京遷都

781年、光仁天皇は山部親王に譲位し、桓武天皇が誕生しました。桓武天皇は仏教色に彩られた平城京の政治を刷新するために、新たな政治の舞台を求めて遷都を決意しました。

そして784年、長岡京遷都が行われ、奈良時代は幕を閉じました。

［桓武天皇］
先人たちが築き上げた律令国家体制は、国力を高め、大規模な事業を行える体力を養ってくれた。この力を利用して朕は、新しい都を造ろうと思う。そこでは、古い氏族や大寺院が口出しすることは許さぬ。天皇が指導的能力を存分に発揮して律令政治を推し進めるという、本来あるべき姿に戻すのだ。
奈良時代を通して培われてきた律令制の純粋な部分に立ち返り、新たな時代を切り開くのだ！

奈良時代を通じて、天皇の下に強大な力を集めて律令国家を運営するという理想が実現され、世界に類を見ない「鋳造大仏の造立」という大事業さえも成し遂げられました。

権力の座を巡って政争が絶えなかった時代でもありましたが、それも律令制を確たるものにするための試行であったのかもしれません。

律令国家の確立を成し遂げた日本は、仏教色を一旦払拭するために新たな地へと遷都し、心機一転、平安時代の幕が開くことになるのです。

登場人物紹介 ／ 用語解説

［由義宮］ 〈ゆげのみや〉

道鏡の出身地である河内国若江郡(現大阪府八尾市)に営まれた称徳天皇の離宮。宇佐八幡宮神託事件のあと、天皇が弓削寺に行幸し、その時の行宮を拡張して由義宮とした。現在、由義神社となっている。

藤原永手

【ふじわらのながて】(714～771)

- 藤原房前の次男。長男の鳥養が夭逝したため、実質的に北家の長。
- 藤原仲麻呂とは対立関係にあり、恵美押勝の乱では孝謙上皇側に参加して活躍し、大納言となる。
- 766年、右大臣、その後に左大臣となり、右大臣の吉備真備とともに政権を主導する。
- 称徳天皇の没後、白壁王(のちの光仁天皇)の擁立に尽力した。

井上内親王

【いのえないしんのう／いがみないしんのう】(717～775)

- 聖武天皇の第一皇女。母は県犬養広刀自(あがたのいぬかいのひろとじ)。
- 光仁天皇の即位に伴い、皇后となる。
- 772年、光仁天皇を呪詛したとして皇后を廃され、大和国宇智郡(奈良県五條市)に幽閉される。

白壁王(光仁天皇)

【しらかべおう(こうにんてんのう)】(709～781／在位 770～781)

- 天智天皇の第7皇子である施基皇子(志貴皇子)の第6子。
- 第49代天皇。称徳天皇の没後、藤原永手らに擁立され、62歳の高齢で即位。

他戸親王

【おさべしんのう】(生年不詳～775)

- 白壁王と井上内親王の間に生まれた皇子。生年については、751年説と761年説とがある。
- 光仁天皇即位とともに皇太子となったが、母が皇后を廃されると、連座する形で廃太子となり母とともに幽閉され、半年後、母と同日に急死する。山部親王を支持する藤原式家の陰謀との見方が有力。
- 親王の死後に天変地異が相次ぎ、「他戸親王の怨霊」が光仁・桓武朝を悩ませることになる。

藤原良継

【ふじわらのよしつぐ】(716～777)

- 藤原宇合の次男。広嗣の同母弟。初名は宿奈麻呂(すくなまろ)。
- 広嗣の乱に連座して伊豆に流罪となったが、2年後に赦されて政界復帰。
- 恵美押勝の乱の鎮圧に功績をあげ、770年に参議となる。
- 光仁天皇の擁立に尽力し、中納言となり「良継」に改名。藤原永手の死去により藤原一門の中心的存在となる。

藤原百川

【ふじわらのももかわ】(731～779)

- 藤原宇合の八男。良継の異母弟。初名は雄田麻呂(おだまろ)。
- 道鏡への皇位継承阻止派として、和気清麻呂の裏で暗躍したといわれる。
- 山部親王(のちの桓武天皇)の立太子にも尽力したが、その即位を見ることなく死去した。

山部親王(桓武天皇)

【やまべしんのう(かんむてんのう)】(737～806／在位 781～806)

- 白壁王(光仁天皇)の第1皇子。母は渡来系氏族の高野新笠(たかののにいがさ)。
- 第50代天皇。784年、長岡京遷都。794年、平安京遷都を行い、独裁的権力で政治改革を推進した。

高野新笠

【たかののにいがさ】(生年不詳～790)

- 渡来系氏族の和乙継(やまとのおとつぐ)の娘。百済の武寧王の10世の孫とされる。
- 光仁天皇即位後、高野新笠と改姓。これには高野天皇(称徳天皇)との血縁をイメージさせる目的があったとする説もある。
- 山部親王の生母。桓武天皇即位後は「皇太夫人」と称された。